

鄧小平批判が

中嶋嶺雄
(東京外国語大学教授)



胡耀邦解任により露呈した中国内政の大きい矛盾

始まった

「鄧小平は経済建設を進め、四つの現代化を行うには……『外国の技術設備を導入して』『工業の技術改造を早め、労働生産性を高める』以外にないと考えていた。そこで鄧小平は……外国と『長期の契約を結び、外国の資本家に『最新・最良の設備』を提供させ、わが国で生産する鉱産物で『償還』すればよいと主張した。これは掛値なしの外国崇拜、外国追従、投降売国の『大政策』である」(中国共産党理論誌『紅旗』一九七六年第七号より)

事件の深刻な意味

多くの読者の皆さんも目にとめたことであろうが、さる一月十六日夜、中国共産党の最高権力者、胡耀邦総書記の解任という衝撃的なニュースを、北京放送局のテレビ・アナウンサーはいつもの背広を人民服にかえて報道していた。そのとき、ふと私の胸に浮かんだのは、このところ、中国の指導者たちは人民服を背広に着替えているけれど、鄧小平主任

が背広を着た姿はついに一度も見なかったという事実である。背広を着たのは胡耀邦であり、趙紫陽であり、あるいは胡耀邦グループの胡啓立、王兆国などの新しいリーダーたちや改革派の面々であって、名実ともに開放政策の最大の推進者であった鄧小平は、若き日のフランス留学時代を除けば、これまで一度も背広姿を見せたことがない。

この小さな事実は、今回の胡耀邦解任劇のもつ意味をシンボリックに表現しているといえよう。

今回の胡耀邦解任は、結果的には、中国の現代化路線を推進してきたリーダーシップ、つまり鄧小平・胡耀邦体制の深刻な内部分裂であるが、しかし事態はそれにとどまることなく、実際には「鄧小平批判」の新たな開幕ではないかと私は考えている。

冒頭に引用した、いまからほぼ十年前、鄧小平が天安門事件で再失脚していたときの批判をそのまま胡耀邦に置き換えただけにすぎないような言葉が、胡耀邦に対して現在投げかけられているけれど、やはりこの批判は鄧小平にたいしてこそ向けられるべきものではないだろうか。

なぜなら、まさに鄧小平によって総書記に引き上げられ、後継者に任命された胡耀邦は、鄧小平が最も信頼する目下の同僚であり、子飼いのエースであったわけで、政策路線上は一心同体であったはずだからである。

表面的には確かに鄧小平・胡耀邦体制の内部分裂なのだが、それは今回の出来事のいわば派生的な結末であって、その本質はいわゆる保守派ないしは原則派が、現在の中国の現代化路線、つまり鄧小平型の改革路線そのものに異議を申し立てていることだと見なければならぬ。

ばなるまい。それは社会主義体制下で鄧小平型の改革路線を進めた場合に、必然的に起るべき矛盾の政治的な反映であった。

いうまでもなく鄧小平・胡耀邦関係の単なる個人的な分裂であれば、事態をそんなに重く見なくてもいいのであろうが、今回の事態は、昨年十二月初旬からの学生デモの大きなうねりを背景としていただけに、きわめて重要かつ深刻な政治的意味をもっている。

今回の事件についての私の率直な印象は以上のとおりであるが、それは実際には鄧小平体制ないしは鄧小平改革への批判と抵抗のドラマの衝撃的な開幕だと思われ、それだけに鄧小平体制は今後も大きな政治的試練にさらされてゆくのではないだろうか。

私は以前から、いわゆる保守派のことを「原則派」と呼んできた。私のいう原則派の最高指導者である陳雲が、一九八〇年十二月、党中央工作会议で「外債問題について」と題する演説を行い、それがきっかけで、日本に対するプラント契約がキャンセルされた経緯などを見ても明らかのように、陳雲らの指導者は、あくまでも社会主義的な原則にとつた経済改革を「穏歩前進」でやるべき

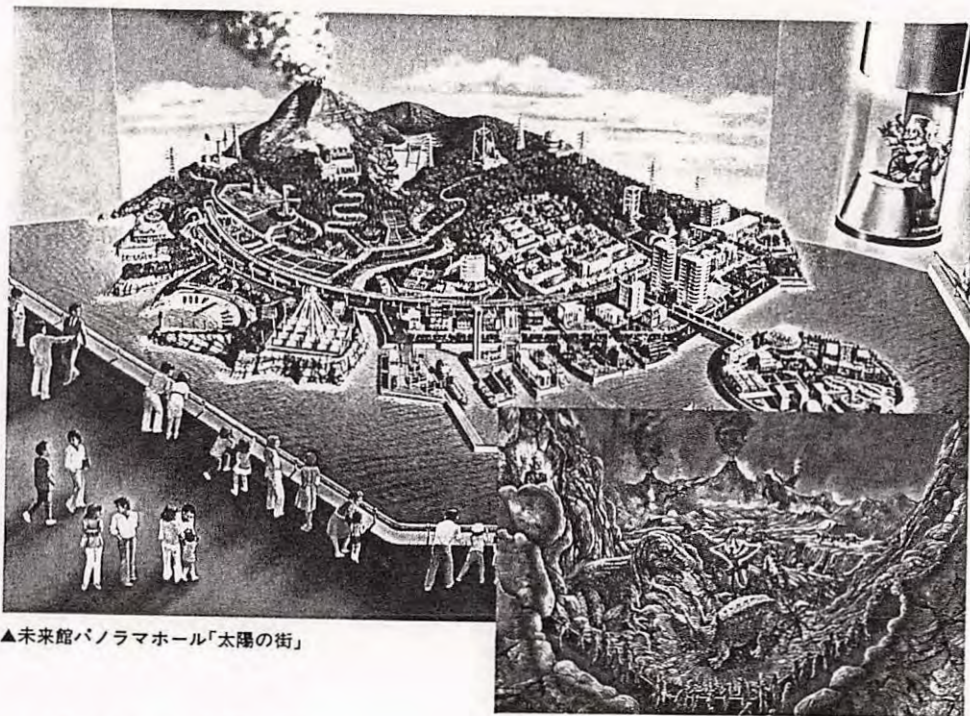
だという意見であり、対外開放も一挙にやれば、矛盾やマイナスが至るところに出てきて、中国の社会主義体制そのものを根本的な危機にさらすだろう、という立場だからである。

これらの人々の思想やイデオロギーを考えると、彼らが本当に攻撃したかった対象は、鄧小平その人ではなかったかと私は見なししている。そして、今日の鄧小平体制の周辺には、不透明な形であるとはいえ、さまざまなレベルの「鄧小平批判」の政治的な連合体制(ポリティカル・コアリション)が存在していることを無視するわけにはゆかない。

こうしたアンチ鄧小平の政治連合に位置する人たちの隠された真の狙いは、「鄧小平批判」にこそあったことは疑いない。ただそこまで「鄧小平批判」を現実政治の日程に乗せるとなると、中国は再び文化大革命のような大混乱に陥らざるをえない。それは彼らにとっても悪夢である。今日の中国では、原則派を含めて、毛沢東時代には絶対に政治の表面に出られなかった人たちがリーダーシップを握っているのだから、あの文革の悲劇だけは避けたいという暗黙の了解ないしは合意

白浜エネルギーランド

未来都市“太陽の街”で自然エネルギーを学ぼう
“地球探検館”でエネルギーの起源を知ろう



▲未来館パノラマホール「太陽の街」

▲地球探検館パノラマホール「恐竜の国」

パノラマホール・太陽の街

自然エネルギーと未来の暮らしについて、ロボット博士が案内する、ミニチュアの街です。

自然エネルギーハウス

21世紀の快適な住まい環境が体験出来ます。

映像ホール

動植物の生命とエネルギーの仕組みを、映像で楽しく紹介。

地球探検館

「海の世界」(浅瀬の海・深海・太古の海)
「恐竜の国」(実物大のサイロップ恐竜の登場)
「マグマコーナー」をお楽しみいただけます。

入館料 大人・高校生100円 小学生50円 幼児200円
(3歳以上) [団体特別料金] 30名以上10%引、100名20%引、学校団体特別料金(高校生以上)50名以上420円
開館 午前9時～午後5時
休館日 毎週火曜日(祝日の場合は翌日)



交通/大阪から特急2時間5分 急行2時間40分
白浜駅——(バス)約13分——白浜浜ホール前

※お問い合わせは……白浜エネルギーランド現地事務所 ☎ 0739-43-2666

が働いている。そのことが一種の政治的凝集力となつてかろうじて作用しているために、一挙に「鄧小平批判」というところまではいかなかったということではないように思われる。

しかしながら、この政治的凝集力は、当面それが働いているということであつて、かりに鄧小平が病弱になるとか、彼の死という事態を迎えたときには、この凝集力もたちどころに解体する危険を秘めているといえよう。

そうした状況のなかで、本当は鄧小平にまで批判が及ぶはずの筋道は、そこまでいかずに、いわばスケープゴートとしての胡耀邦に批判が集中したのだといつてよいだろう。

鄧小平・胡耀邦体制とはいいながら、胡耀邦が総書記つまり最高権力者としてのプレス・テッジに欠けていたことは、中国内外の衆目の一致するところであつて、彼はあちこちで多くのミスを犯し、弱点をさらけ出していた。原則派は、そうした弱さを露呈した胡耀邦に批判を集中したのだといえよう。いわば鄧小平・胡耀邦体制の「弱き環」に攻撃を集中することによって、鄧小平・胡耀邦体制そのものを揺さぶり、保守派・原則派としての

ポスト鄧小平への不安

第一段階の戦略を勝利に導いたというのが今回の事態ではないかと思われる。

こうした前提で見てみると、昨一九八六年秋以降、「胡耀邦おろし」の動きが中国指導部の内部で起つていた。それが今回ついに実現しただけに、このことは当然、鄧小平以後への大きな不安を誘うものである。中国のリーダーたちは、鄧小平以後を視界に入れようとして、今後、共通に立ちすくむという状況が出てくるだけに、ここ数年の中国が示したような大胆かつ柔軟な内政・外交の大きな展開は当然ありえないだろう。

多くの公式論調が必ず「鄧小平文選」の引用で論文を締めくくるといった、まさに毛沢東時代を思わせるような傾向が頻出している。

つい最近も、「鄧小平氏は、中国史上、最も偉大な尊敬すべき領袖の一人である」との論文が、在米中国人の書いたものであるといえ、「人民日報」(一九八七年一月二十三日付)に出ており、政変のために一カ月遅れとなつた「中国画報」の最近号(一九八六年十二月号)も、「われらの鄧小平」というグラビアを特集している。

「偉大な領袖」という枕言葉はまさに毛沢東に冠されたものだが、こうした鄧小平崇拜が起りつつあること自体、当然のことながら、鄧小平以後への大きな不安をかきたてるであろう。同時にこのことは、結局、中国は皇帝型権力構造を歴史的・伝統的に保持せざるをえないという、その悪しき政治的悪循環から依然として断ち切れていないということを物語っている。

次に、今回の胡耀邦解任劇については、手続的に見ても、将来の「鄧小平批判」を誘うような問題があることを指摘したい。中国の政治に関して手続きを問題にしても意味が

さっ、新しいおうちへ。

春から新しいおうちへ
お引っ越し、うれしいな。
パパには書斎、
ママにはひろーいお台所、
ヒナりのこども部屋は
ワタシのために。
ボチにだって、
お庭に新しいおうち
つくってあげるって。
みんなにいい春、
よかったね。



いまこそチャンス！

マイホームをお考えのかたに、低金利時代のいまがチャンスです。サイギンでは、住宅ローンをはじめ住宅金融公庫など公的融資のお申し込みまで、幅広くお手伝いしています。

土地・住宅・マンションの購入に	親子で協力して購入する場合に	お住まいの増改築や改装資金に
マイホームプラン	親子リレープラン	リフォームプラン

サイギン住宅ローン

暮らしの友



埼玉銀行

ないかもしれないが、最近の中国は、毛沢東時代とは異なっており、民主化・法制化という大前提のもとに政治を営むのだと公言してきただけに、この問題はやはり無視できない。

そもそも一月十六日の党中央政治局拡大会議という拡大会議方式で事態を決着したことに、根本的な疑義があり、これは明らかに党規約違反だといわねばなるまい。なぜなら、中央委員会も党大会も招集されずに、党の最高権力者が、正規の政治局会議ならまだしも、その拡大会議で解任に追い込まれたからである。

現在の中国共産党は、毛沢東時代の党主席という呼称に替える人たちによって担われているために、一九八二年の中国共産党十二回大会以来、主席制を廃し、党中央の最高指導者は書記局(書記処)の長でもある総書記が担うことに、制度的に改変された。そのチーフが胡耀邦総書記、つまり英語でいうセクレタリー・ゼネラル、書記長である。そのような最高指導者を辞任させるのに政治局拡大会議という方式を用いたことに問題があるのだ。中国共産党政治局は現在、政治局委員候補をあわせて二十二名の陣容であるが、そのうち

ち二名が欠席し、十八名の政治局委員と二名の候補委員のほかに、それにほぼ等しい十七名の党中央顧問委員会の長老、さらに四名の書記と二名の中央規律検査委員会の責任者および他の関係者を加えて拡大会議が開かれ、それらの長老の圧力で問題を決着したことが明らかにしている。

こうした党規約にもない党中央の会議で事態を決着するやり方は、文革中しげば行われたことであるが、オフィシャルなデザイン・メイキングの機関ではない拡大会議とか工作会議といった方式で意思決定をするという非民主的なパターンを、今回も受け継いだのである。

そうした形式論はともかくとして、実質論として見ても、これをソ連共産党にたとえれば、中央委員会も開かず、グロムイコのような第一線を退いたはずの長老たちが果まつて、ゴルバチョフ書記長の最近のやり方は気に入くわれないといつて解任してしまったのと同様である。またや「長官意思」つまり鄧小平の鶴の一声で決着したという、手続的にもきわめて問題の多い強引なやり方なのである。

そこで、手続き上は早急に中央委員会総会(第十二期七中全会)を開かなければならぬのであり、そのためもあつてか、胡耀邦にかつて当面の最高指導者になった趙紫陽首相は総書記「代理」ということになつてくる。この「代理」は英語では「アクティンク」となっており、日本の新聞は「代行」と訳しているが、この「代理」は、中国の政治システムにおいては、次のしかるべき会議で議決されるまでの暫定的なものではあつても、実質的にはそのポストがすでに決つている場合に用いられる。そのような慣行からすれば、趙紫陽はこの秋に予定されている第十三回党大会で「代理」がとれ、正式な総書記に就任するという見方も、形式論上は成り立つように思われる。

しかしながら問題は、はたして趙紫陽が今後の中国の最高指導者たりうるか、にかかつてゐる。私自身は、従来から、趙紫陽という人が、中国政治のラインに立つ人物であるかどうか、大いに疑問をもっている。彼はいわばスタッフの総大将のような人材であつて、イデオロギー的・思想的なリーダーシップをもちうる人物ではないのではないかと。

彼は、長いあいだ地方の行政官僚であった。したがって中国共産党内に組織的な基盤や人脈をもっていない。もともと広東省を基盤とし、「広東王」といわれた陶鑄の部下であって、陶鑄が文革中に失脚し、趙紫陽も一時は失脚したが、その彼が首相に就任したのは華国鋒時代であって、鄧小平にも華国鋒にも一定の距離がある人物だっただけに、その双方から認められることができたという一種の妥協の人事であったことを忘れてはならない。

その趙紫陽は、國務院の首相として各国に出向いたり、中国の行政実務を司ることができるとも多事多難な中国を担いうる人材であるかどうかには、大きな疑問が残るのである。

もとよりどんな人物でも、ひとたびある地位につくと、それなりの基盤も人脈もできあがってくるから、彼もあなどりがたい力をもち始めているといえるかもしれないが、いずれにしても趙紫陽自身、党の胡耀邦と並んで政務を司る立場から、最近の鄧小平改革一辺倒であつただけに、保守派ないしは原則派の立場からすれば、胡耀邦批判の延長線上に趙

紫陽批判も含まれるであろう。今回、趙紫陽も自己批判をしたと伝えられているだけに、その将来には、まだまだ大きな不安が残っている。

このように見てくると、いずれにしても、今後の中国共産党の最高リーダーシップをめぐる状況は、きわめて不透明・不安定になる可能性があるといえよう。

リーダーシップは原則派の手に

それでは現在のリーダーシップをどのように位置づけるべきか、というかなり困難な作業をここで試みてみよう。

今回の胡耀邦解任ドラマではつきりしている問題は、鄧小平がかなりずいぶん役回りを演じたことではなからうか。みずから鼓吹した政策のスケープゴートに胡耀邦を追いやって半面、彼自身はあたかも以前から原則派であつたような姿勢を最近示している。しかしながら、人民公社の解体をはじめ、彼自身これまで非毛沢東化を進め、毛沢東時代と一八〇度転換した改革路線をあおってきたことはまぎれもない事実であり、非毛沢東化とい

う点での鄧小平の功績は絶大だといえよう。そうした鄧小平体制のなかで、明らかに鄧小平と路線の対立する系列に、いうまでもなく陳雲グループが存在する。陳雲はこのところ病弱だといわれ、年齢的にも鄧小平と同年の八十二歳になるのだが、中国の経済運営という点では、依然としてきわめて大きな影響力を保持しているといつてよい。現存の指導者で『文選』が出ているのは鄧小平と陳雲の二人だけであることも、このことを示している。彼は、鄧小平のように切れ者ではない半面、その人柄からしても敵の少ないリーダーであり、人望があるといわれている。もしも中国共産党内で無記名投票が行われたなら、陳雲がトップに立つのではないかと、私は従来から思っていた。そして私は、この陳雲系列のなかに、最近、台頭の著しい李鵬副首相や陳雲の影響下で経済運営に力をそいでいる姚依林副首相らを従来から数えてきた。

日本の新聞などは李鵬を改革派に数えていたけれど、私はやはり原則派だとみなしている。彼は周恩来とも姻戚関係になるわけで、周恩来グループの人たちとも連携のとれる人

物である。最近の文革全面否定の潮流のなかで、文革にコミットした周恩来系列の人びとは次々に棚上げされてきているのだが、鄧小平路線に不満をもつそうした周恩来グループとも連携しつつ、李鵬自身はその長いソ連体験を活かして、最近、台頭の著しいソ連留学組の指導者のなかで最も強力に頭角をあらわしてきている。

彼が胡耀邦を問責する昨年十二月三十日の会議に列席したことをもって改革派と見る論調があるが、それは彼が国家教育委員会主任という職責上、学生デモ対策の衝に当る立場にあり、そのためこの会議に列席していたにすぎないのではないかと思う。

この原則派のグループには、さらに薄一波、胡喬木、鄧力群、陳丕顯、王震といった人たちがいる。彼らは必ずしも陳雲派とはいえないかもしれない。むしろ彭真・全人代常務委員長系列であろう。彭真も高齢だが、彼の力は依然としてあなどれない。今回大きな役割を演じた陳丕顯は、文革中上海の路上にまで大字報を書かれて批判された旧実権派であるが、当時から北京の彭真と並んで注目された人物であつた。

これら原則派のなかで、だれが陳雲派で、だれが彭真派かは、必ずしも明白ではなく、当面その区分は大きな問題ではないのだが、胡喬木、鄧力群、王震、陳丕顯などは彭真派であり、李鵬、姚依林、薄一波あたりが陳雲グループではなからうか。

さきに見た周恩来系列には国家主席の李先念、周恩来未亡人の鄧穎超など、最近棚上げされてしまった要人たちが存在する。先日また「おれの目の黒いうちは鄧小平の思いどおりにはさせんぞ」と頭張っていた故葉劍英の系列の人たちだといつてもよいだろう。

さらに、今回の事態の背景に軍の抵抗があつたのではないかと思われる。私自身は、現在の中国の政治的展開のなかで、人民解放軍がかつてほど大きな影響力をもっているとは思わない。ある種のシビリアン・コントロールが強くなっていることは事実であろうが、楊尚昆・党中央軍事委常務副主席、楊得志・人民解放軍総參謀長、余秋里・人民解放軍総政治部主任らはいずれも党中央軍事委員会の要職にあつて、保守派・原則派の一角を形成していると思われる。

これら軍人たちの不満は、当面の百万人兵

力削減などによる退役将校の不満を代弁するであろうし、改革路線の非受益者層としてさまざまな不満をもっていると思われる。軍人たちがすれば、「おまえたち（胡耀邦・趙紫陽など）は軍歴をもっていないではないか」という不満もあるだろう。軍人のなかでは、楊尚昆や習仲勳ら文革で強く痛めつけられた鄧小平直系の人びとが改革派だとも見られるが、軍全体にはやはり保守派・原則派ないしは「毛沢東思想」信奉者がまだ多いといえよう。

それに今回は、改革急進派知識人として党を除名された方励之・中国科学技術大学副学長、王若望（文芸評論家）、劉賓雁（作家）ら、学生にも人気があつた党内反体制派知識人とは対照的に、周谷城、費孝通といった民主諸党派の著名な長老知識人が、いずれも文革受難者であつたにもかかわらず、きわめて保守的・原則的な立場に立っていたことが印象的である。

こうしたリーダーシップをめぐる状況が、胡耀邦おろしの渦中で大きな作用をおよぼしたことはいうまでもない。

胡耀邦自身が積極的に人材を登用しはじめ

ていた胡耀邦系列の若手としては、いうまでもなく胡啓立・党中央常務書記、王兆國・党中央書記、副首相の喬石、外相の吳學謙、失脚した党宣伝部長の朱厚沢ら共産主義青年団出身の「赤いエリート」たちが存在した。

これに対して、改革派のなかでも趙紫陽系列の人と目されるのが先日来日した田紀雲副首相であろう。そして、万里副首相をどこに位置づけるべきかも重要な点であり、彼は鄧小平直系として胡耀邦とともに改革派の重鎮であったことはいうまでもない。八〇年代初頭は、鄧小平・胡耀邦・万里体制といえるぐらいの存在であり、中国の改革に大きな役割を占めていたが、最近では民主化運動の当初ほどには注目されていない。

天津市長の李瑞環が将来、趙紫陽の後継者として首相になるのではないかといわれ、改革派と目されているが、彼は一九八〇年九月の全人代における宝山製鉄所問題詢問会では、北京代表として発言し、非常に厳しい対日批判をやっていることを想起すべきである。宝山プロジェクトは、「(日本に)前半でだまされた。後半にだまされないようにするにはどういう方法があるか」とさえいって、

当時の国務院冶金工業部辦公室的周伝典主任を問い詰めている(この点については拙著『現代中国の政治と戦略——革命国家はのまま「西側化」するのか』PHP研究所、一九八四年、参照)。一般に伝えられるように、日本にとって好都合な改革派だとはいえないのではないのか。

以上において、私なりの政治地図を描いてみたが、ここに見られるように、中国の政治状況はまさに星雲状態であるといえ、全般的に陳雲、彭真らの率いる保守派・原則派がきわめて強力になってきていることを無視できず、私はすでに中国のリーダーシップは六対四ないしは七対三の割合で、保守派ないしは原則派の手に握られていると見ている。

なぜ胡耀邦解任劇が起ったのか

今回の胡耀邦解任に至る動きをクロノロジカルに振り返ってみると、なぜ胡耀邦が失墜したのかはつきり理解できる。まず、原則派と改革派との路線闘争がきわめて明瞭に表面化したのは、一九八五年九月の中国共産党全国代表会議という異例の会議だった。私は

すでにこの会議で路線闘争が深刻化したことを、これまでさまざまな機会に述べてきており、陳雲路線と鄧小平路線との対立としてそれを描いてきたが、こうした状況のなかで、いわゆる鄧小平改革が転機を迎え、従来の「放」から「収」へと大きく転換したのは、具体的には「外貨管理違反実施処罰細則」が厳格に通達された一九八五年四月一日前後からだと見ることができよう。

そもそも現在の鄧小平体制の改革は二つの大きな柱からなっている。一つは国内経済活性化であり、もう一つは対外開放である。この二つの柱がうまくいっていれば、今回のような事態は起らなかった。ところが、改革路線そのものがうまくいかなくなってきて、あちこちにひずみや問題点が出はじめていたのである。こうして鄧小平丸という船が大きく傾き始めた。そして船長の鄧小平と甲板長の胡耀邦とが、その原因や責任をめぐって口争いをはじめ、内輪もめが起っていたのだといえよう。他方、そんな船に乗ったこと自体が間違っているのかという、当初からくすぶっていた原則派の批判や不満が一挙に吹き出したのが、今回の事態だといわざるをえない。

改革路線への批判がはつきり出てきたのは、さきに述べた一九八五年九月の党全国代表会議であったが、そもそもこの会議は異例の会議であり、中国共産党史上にも、建国以来一度しかこうした全国代表会議は開かれたことがない。それは一九五四年の高崗・饒漱石反党連盟事件という緊急事態を処理するための会議であった。

そのような種類の会議が、なぜ一九八五年九月に開かれることになったのか。この会議の開催決定は八四年十月に行われている。そのころは鄧小平改革がピークにあった時期で、農業生産も対前年比一四〇近い増産を示していた。対外開放の結果、貿易もかなり順調に推移し、外貨準備もかなり多くなっていった時期である。

鄧小平体制、あるいは鄧小平・胡耀邦体制としては、そうした状況を背景に一挙に体制を固めようとしたのであろう。次に開くべき一九八七年の党大会まで待てなかったのであるが、改革派にとって不幸なことに、一九八四年秋に開催を決定した直後から、中国の経済状態が急速に悪くなってきた。そうしたなかで開かざるをえなかったこの会議は、最終

的には鄧小平と陳雲の明白な路線対立で終わっている。会議の最終日の報告はこの二人が行なったが、鄧小平が改革の重要性を鼓吹したのに対して、陳雲は社会主義の原則を主張した。例の「一萬元」の出現を激しく糾弾していた。すでにこのころから明白な路線闘争が深刻化していたのである。

それが決着をみないまま、昨年九月の六中全会を迎え、「精神文明に関する決議」をめぐって再び問題が起った。日本の新聞は、この決議によって中国の改革がさらに進み、いよいよ経済改革から政治改革へのステップが踏まれるだろうと書いていたが、この決議の全文を読んでもみると、原則派の内部的な抵抗がいかに根強いかが示していた。

こうした路線闘争が存在していただけに、特に胡耀邦は人事の若返りをはかることによつて、みずからの体制を固めようとしたものと思われる。彼は八六年五月、人材の若返りのために中央委員会の三分の一を入れ替えると提案したとも伝えられている。こうした方向とリンクして、胡耀邦の忠実な若き同志であった胡啓立・党中央常務書記の上海における政治改革演説も八六年九月に行われた。胡

備前岡山
元祖
まぶさ
安政三年創業
岡山中納言
廣榮堂本店
本社/岡山市津島六〇
電話(086)2725101

行った気にならないような雰囲気がある。そこに存在し、常に自分の背後に皇帝のような存在が控えていること自体に違和感を感じたことは当然であろう。そして皇帝・鄧小平から見れば、自分が指名したにもかかわらず、このころ胡耀邦は勝手気ままな動きをしている、危なくて見ていられないという気持ちもあったのではないかとと思われる。

このあたりから鄧小平・胡耀邦体制には個人的にも亀裂が入り、両者の関係がうまくいかなかったのではないかと。

しかしながら、今回の事態も、一連の鄧小平改革の蹉跌も、基本的には鄧小平に全責任があるといえよう。彼が「四つの現代化」という非毛沢東戦略に基づいて改革を進めてきたキーン・パーソンであったことは明白であり、彼は最後の段階で、自分自身の立場を守るために胡耀邦をスケープ・ゴートにしたのである。この事実は将来起るかもしれない「鄧小平批判」の際の大きな罪状になりうるというよう。

こうした状況のなかで、すでに昨秋以来明白な輪郭を描いていた鄧小平・胡耀邦間の亀裂をとらえて、原則派の一斉攻撃が胡耀邦

日中関係を問い直すとき

胡耀邦失墜後の日中関係を展望してみると、彼が日中友好関係の先頭に立っていただけに、当面、日中関係が厳しさを増してくることは歴然としてゐる。

それにしても中国がこのような事態に至った原因として、「ブルジョア自由化」という点での日本の影響力は圧倒的であっただけに、日本の責任もきわめて大きいと私は考えている。この間、わが国の政・財・官界は、挙げて中国の改革に甘い幻想を抱き、バラ色の中国市場を求めて殺到し、中国の「西側化」を一挙にはかろうとしたのではなかったか。つい先ごろまで、中国は鄧小平・胡耀邦体制

に向けて行われた。昨年十一月の中央政治局拡大会議においても、このことははっきりしていたようであり、原則派のなかの長老や軍がいろいろ発言し始めた。特に王震の役割が今回は大きかったようである。王震は中日友好協会の名誉会長で、来日するとまことに物分りのよいことを言うけれど、今回は非常にハードなラインに徹していた。そうした状況のなかで十二月を迎えたのである。

私はたまたま十二月初旬に訪中していたが、日本でいつも発言しているような意見、つまり「近代化は社会主義ではとても無理だ」というようなことも含めて、人民大会堂で開かれた日中シンポジウムで私は報告した。この私の報告にたいして、シンポジウムに出席していた何人かの学者から、よく本音をいつてくれたと手紙をもらったり、涙を流さんばかりに握手されたのが、つい先日のことなのである。

このことから見ても、十二月上旬までは政治的状况が異常にきしめはじめたのとは対照的に、知識人などのあいだにはかなり自由な雰囲気が増え始めていたように思われる。それがやがて私の帰国直後の十二月五日からの学

ですっかり安定し、日中関係は未来永劫に友好のきずなで固く結ばれていて、何も問題はない、と唱えていたのは、当の日本政府自身であり、つい最近の東欧諸国訪問に際しての中曽根首相であった。

中国共産党第二号文獻（一九八七年）にも示されているように、胡耀邦の罪状の一つに、一九八四年の建国三十五周年記念式典に日本の青年を三千名も勝手に招待したことが挙げられている。この点は、当時から私も日本政府首脳や外務省首脳に慎重に対処すべきことを強く警告していた事柄であった（拙著『日本人と中国人 ここが大違い』ネスコ・ブックス、一九八六年、参照）。日本の四〇分の一の経済水準である中国から、三千名の青年をオール・ギャランティで招かれること

生デモに飛び火していった。学生デモは、当初の民主化要求からまたたく間に一種の反体制運動へと高まっていた。そして十二月二十日以降になると、中国内部の政治の展開を後追いしていく形で、『人民日報』の社説などが学生デモに強い警告を発するようになり、運動鎮圧の論調に急転換していった。改革派の立場に立っていた中国のメディアは、当初は学生デモにかなり共感を示していたが、それが一変していき、見る見るうちに鄧小平・胡耀邦体制の重大な危機が訪れたのである。

最終的には、この学生デモへの対応やその取り扱いについての責任が追及され、十二月三十日の党中央緊急会議で「胡耀邦おろし」がさらに進み、ついに一月十六日の中央政治局拡大会議で彼が切られてしまったのであるが、今回の事態は基本的には、今日の中国をどこへ導くのかという根本問題をめぐる路線闘争の一コマであった。

だが、胡耀邦解任によって何が解決され、何が決着したのか。実は何も解決されていない、何も決着していないのである。そこに今日の中国の深刻な問題があるといえよう。

自体が問題ではないか。中国に招かれるなら、渡航費ぐらいは自前で負担すべきではないか。それができないなら、日本側も中国から三千名の青年を招待するための予算措置を講じたうえで、この招待に必ずすべきではないか。それが、客を招いたら（請客）招きかえす（回請）という中国人と付き合う原則だということを主張したのだが、当時の中国ブームのなかでは、私の主張は顧みられずに、日中青年の友好というスローガンのもとで、三千名が中国に招待されたのであった。しかも、日本の青年たちは中国をナウいフイーリングで闊歩し、ルンレン気分で行方不明なままに、日中戦争にたいする贖罪の意識も表明されなかったとして、その直後から三千名の青年招待問題には中国内部で批判が起り、



OPEN 3周年
25th Anniversary

開業3周年記念
ザンキューイズ
キャンペーン

海外旅行が当たる！
クイズ

〇の中に正しい数字を入れてください。

ありがとうございます
おかげさまで
ホテル京阪は開業
〇周年

●ご応募方法
クイズにお答えいただき、必要事項（氏名・住所・電話番号・職業・年齢）をご記入のうえ、ホテル京阪京都のフロント応募箱またはレターボックスに封筒で郵送ください。

●プレゼント
正解者の中から抽選で豪華プレゼントをさしあげます。

特賞 海外旅行（ゲーム4日間）
●ベア1組

1等賞 ホテル宿泊券
●ベア5組

2等賞 TOP OF KEIHAN 食事券
●ベア15組

3等賞 ケーキセット券
●50名様

●あて先
〒601 京都市南区東九条西山王町
31番地 ホテル京阪「開業3周年記念サ
ンキューイズ」係

●応募締切日
昭和62年3月31日（当日消印有効）

●抽選日 昭和62年4月上旬

●当選発表
ご本人への通知をもってかえさせていただきます。

■空港バス、ホテル前より発車

ホテル京阪京都
新幹線京都駅南口
☎075(661)0321
東京案内所 ☎03(45)6231

後援ホテル
（ホテル京阪大阪）☎06(945)0321
（大阪駅前）☎06(945)0321

ここは夢みる城。

ハードなビジネスタイムの後は深い時間を過ごす。
時には軌道を変え、とっておきのプライベートスポット、
私のホテルグランドパレスへ——ここは夢みる城。
さり気ない優しさと、ゆき届いたサービスが嬉しい。
傾けるグラスに、ゆったりと、充実の二文字が溶けていく。



Hotel Grand Palace

KUDAN TOKYO

〒102 千代田区飯田橋1-1-1 ☎(03)264-1111

●地下鉄東西線・新宿線(九段下駅)徒歩1分・東京駅より車で5分・上野駅より車で15分

一方、南京虐殺資料館などが各地につくられることになったのである。保守派・原則派のリーダーたちが眉をひそめていたことはいうまでもない。

このような事実は、日中友好のあり方、日中関係のあり方を根本的に考え直すべき重要な材料であったはずなのに、わが国政府、特に中曽根政権はこうしたことを顧みずに、中国が日本に向ける面々とだけ、例の日中二十一世紀委員会を中心として友好関係を緊密化したことは、むしろ大きなマイナスであったといわざるをえない。胡耀邦、胡啓立、王兆国らは、常に日中二十一世紀委員会の中国側の重要人物であったが、彼らは、日本との友好関係が行き過ぎたと内部で批判され、特に胡耀邦は、現代の汪兆銘(重慶政権から脱出して南京に親日政権をつくり、漢奸(売国奴)といわれた)になぞらえられていたのである。そのような中国の事態を見ずに、最近も中曽根首相は、胡耀邦との家族ぐるみの付き合いを誇らしげに語っていたばかりである。ある中国大使経験者も、胡耀邦との家族ぐるみの付き合いを誇っていたが、最近の胡耀邦批判のなかで、「一九八四年に外国要人を勝手に

自宅に招いた」と批判されているその「要人」とは、当時の日本大使であると思われる。

「君子の交わりは淡きこと水の如し、小人の交わりは甘きこと醴(甘酒)の如し」(荘子)という言葉にあるように、一国の宰相や大使たるものは、中国首脳との交わりも君子として淡くあるべきで、家族ぐるみの甘い関係などは小人のすることとして軽蔑されるのみならず、きわめて危険な関係であることを私はしばしば主張してきたつもりである。

しかも中曽根首相は、去る十一月上旬、中日青年交流センター定礎式出席を名目とし、藤尾問題陳謝を実質的な目的とした訪中において、胡耀邦らを前にして、まさに中国の路線闘争にコミットするような演説をしている。中曽根首相は「青年」、青年は人類進歩の原動力である。わが国の明治維新は多数の若者がわが身を顧みず守旧派と戦い、わが国を封建国家から近代国家へと脱皮させた壮絶なドラマであった」とまるでアジテーターのような演説を行なったのだが、これを聞いていた胡耀邦は、すでに彼にたいする批判がくすぶっていただけに内心さぞ困惑したことだろう。一方、守旧派、つまり保守派ないしは

原則派の人びとは、何とけしからんことをいうのか、こんな連中と個人的な家族ぐるみの付き合いをしている胡耀邦は許されないという怒りに燃えたことと思われる。現に保守派・原則派のイデオログ、鄧力群書記(前宣伝部長)は、「中曽根は軍国主義を奨励しているが、胡耀邦は中曽根と親交を結んだ」と厳しく指弾している。

このように考えてくると、中国の着実な経済発展を阻害する形で中国市場になだれ込み、いたずらに消費性向をまもり、たちどころに中国の経済バランスを崩し、深刻な外貨不足に陥らせた日中関係のあり方そのものが問われなければならないだろう。

こうして日本側の対応にも大きな問題があっただけに、中国は当面、原則派の台頭とともに、GNP一%枠の問題や、さらに日本の「軍国主義化」などに厳しい注文をつけることになるであろうし、半面、中ソ関係の改善は今後さらに進むものと思われる。

やはり中国は中国共産党一党独裁下のまぎれもない社会主義国家であることを、この際、改めて十分に認識し直す必要があるのではなからうか。

(写真提供・共同通信)